

まじわり 146 号

2015 年 3 月 8 日 発行

【巻頭言】『神の安息と世界の平和』

司祭 バルナバ 菅原裕治

今回は、ヘブル人への手紙第三章一四節～四章一四節の部分から学びたいと思います。

「キリストに連なる者となるのです」と確信を述べた著者でしたが、次に詩第九五篇を引用して、そこに描かれている出エジプトの出来事を信仰と関連させます。それは、聖書（旧約）を踏まえ、イエス様により示された確信をより深めるためです。

出エジプトの出来事は、現在でも新しく「エクソダス」という映画が製作上映されることから分かる通り、神のイスラエルに対する救いの物語として有名です。しかし、イスラエルが神の声に聞き従わずに反抗してしまった警告の物語という側面もあります。詩第九五篇はそのことを語っているのですが、エジプトから出発した最初の世代の人々は、それを率いたモーセを含めて、約束の地に入ることはなかったのです。神が四〇年間憤り、彼らを「御自分の安息にあずかせはしない」と誓われたからです。なぜそれが起こったのか、それは、「不信仰のせいであつた」と著者は述べます。

これらのことを受けて、四章が始まりますが、四章は三つの部分に分けられます。最初は、三章で述べられている、「神の安息に入ることが出来なかった人々と比較して、キリスト者は神の安息に入ることが許されている」ということの確認です。私達にも「福音が伝えられているからです」（四・一～三）。

そしてすぐに第二の部分に続きます。そもそも神様の業は、「創世記」の記す通り完成していた、すなわち最初から「安息」は七日目に完成しており、またすべての被造物に約束されていたということです。それではなぜ出エジプトの出来事があつたのか、彼らは「安息」に入ることができなかったのか。それは神様に対する不従順であると、あらためてダビデの詩第九五篇から確認するのです。同時に、キリスト者は、安息に入ることを改めてより明確に約束されているからこそ、その不従順の悪例に従わないように警告するのです（四・三～一〇）。

これらから第三の部分に続きます。それは、キリスト者は、「神の安息」に入るために努力しなくてはならないということです。なぜなら「さもないと、同じ不従順の例に倣って墮落する者が出るかも」しれないからです（四・一一）。

ここから分かることは、「神の安息」への招きは、与えられたら、決して失うことのない、特権のような事柄ではないということです。また人間が「神の安息」に関して、善意であっても悪意であっても、言葉を重ねて自分の都合のよいように説明したとしても、「神の言葉は生きており、力を発揮」し（四・一二）、また「神の御前では隠れた被造物は一つも」存在しないということです（四・一三）。

このように述べるヘブル書の著者は、少し排他的な福音を述べ、また人間の努力を強

調しているようにも思えますが、そうではありません。著者は、イエス様によって実現した救いについて、詩第九五編を振り返ることによって、それが誰でも分かりやすい福音であるからこそ、人間が所有し、自由にできるような事柄ではないことを強調しているのです。そしてだからこそ、信頼に値するものだと確信しているのです。

著者は、最後に大祭司であるキリストへの信仰を再度述べます。ここでは「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではない」と述べ、イエス様がまさに苦しみ悲しむ人間の隣におられることを示します。だからこそ、人間の思いから生まれる主義主張に頑ななることでもなく、また現実の出来事に失望することでもなく、イエス様を通して「憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」と述べてこの部分を終えるのです。

著者がこのように述べる背景には、旧約にある人間観が関係しています。人間は、被造物の中で独特ですが、それは人間が特別に優れているからではありません。欠けがあり、か弱い部分があり、間違いもする。しかし、そうであるからこそ、神の恵みをもっとも現れるのです。そしてその恵みのもと、神への従順さと、そこから人と人とのつながりを考える時、いつの時代であっても、一人ひとりが独立すると同時に、尊重される世界が実現し、神の安息が何であるかが示されるのです。その具体例がイスラエルのはずでした。

著者は、今やそれはイエス様を通じた信仰に生きる人々託されていると語ります。それは私たちの聖パトリック教会を含めた個々の教会に他なりません。約二〇〇〇年前の時点で、さらに一〇〇〇年前を振り返りながら、未来に向けてヘブル書の著者はそう確信していたのです。

この壮大な確信は現代でも大切です。そして、ここで語られている神の安息とは、この世界に今も実現すべき、神が求める本当の平和に他なりません。

武力による平和は、自らの様々な力が強い限りは維持できるかもしれませんが、しかし、それは、神様の与える平和のように、永遠に維持することも、主義主張が異なる他者と共存しながら共有することはできません。しかし、ヘブル書の著者は、イエス様を通して、本当の平和が、最初からあり、また誰でもいつでもそこへ招かれていることを確信しています。現代の私たちも、今もこれからも、この確信に立ち続けたいと思います。